

ヨハネによる福音書22-71節 「いのちのパン」

1A 肉による求道 22-29

1B 執拗に探す群衆 22-24

2B 業への拘り 25-29

2A 天からのマナ 30-40

1B 神からのマナ 30-33

2B 終わりの日の甦り 34-40

3A 永遠に生きるマナ 41-51

1B 御父の引き寄せ 41-46

2B 天からのパン 47-51

4A イエスの肉と血 52-59

1B 飲み、食べること 52-54

2B 留まること 55-59

5A つまずく弟子たち 60-71

1B 霊といのちの言葉 60-65

2B イエスにある永遠のいのちの言葉 66-71

本文

ヨハネによる福音書6章の後半部分を見ていきます、22節からです。前半では、イエス様が五千人の男たちにパンと魚を与えられたら、彼らが王としてイエス様を祭り上げようとしたので、そこを退かれたということ。そして弟子たちは舟に乗り込んだけれども、夜中に強い風でどうにもならない時に、イエス様が水の上を歩かれて舟に乗られたというところを見ました。

1A 肉による求道 22-29

1B 執拗に探す群衆 22-24

22 その翌日、湖の向こう岸にとどまっていた群衆は、前にはそこに小舟が一艘しかなく、その舟にイエスは弟子たちと一緒に乗らずに、弟子たちが自分たちだけで立ち去ったことに気づいた。

23 すると、主が感謝をささげて人々がパンを食べた場所の近くに、ティベリアから小舟が数艘やって来た。24 群衆は、イエスも弟子たちもそこにはいないことを知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り込んで、イエスを捜しにカペナウムに向かった。

これはさながら、「追っかけレポーター」のようです。王として祭り上げているイエス様が、どこに行ったのかを追跡して、それでカペナウムにおられるイエス様を見つけた次第です。小舟には、弟子たちしか乗っていなかったのを見て、確かめています。イエス様がまさか水の上を歩かれたことについては想定外だったでしょう。59節を見ると、イエス様はカペナウムの会堂で教えておられ

たとあるので、会堂でイエス様の姿を見たのかもしれませんが。

2B 業への拘り 25-29

25 そして、湖の反対側でイエスを見つけると、彼らはイエスに言った。「先生、いつここにおいでになったのですか。」26 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。この人の子に、神である父が証印を押されたのです。」

イエス様は、ここで何とかして、ここに来た群衆たちに、ご自身にこそ永遠の命があり、ご自身のところに来て、その命を得てくれるように願っています。ところが、彼らが捜していたのは、印を見たからではなく、パンを食べて満腹したからだと言われます。そう、彼らが熱心にイエス様を捜している、あたかも主ご自身を捜しているように見え、主ご自身を求道しているように見えますが、動機が間違っていたのです。これは午前礼拝でじっくりと学びました。イエス様を王とするといっても、それは自分たちの願っていることをかなえてくれる対象であって、自分のための王なのです。しかし、イエス様のところに来る、イエスを信じるとは、本当にこの方を王とすることです。つまり、この方とこの方として受け入れ、ひれ伏し、すべてを明け渡すことです。それがイエスを「主」とすることです。それをイエス様は彼らに分かる言葉で、「なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。」と言われたのです。

そして、これが「人の子」が与える食物だ、父が認証していると言われているのは、ご自身がキリストであり、父なる神から聖霊によってキリストであることが認証されているということでもあります。これは 5 章で、「わたしを遣わされた父ご自身が、わたしについて証しをしてくださいました。(37 節)」と言われていて、具体的にはバプテスマのヨハネがイエス様にバプテスマを授けた時に、天からの声がして、「これは、わたしの愛する子。わたしがこれを選んだ。」と言われたことを指します。

28 すると、彼らはイエスに言った。「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」

イエスを自分の利益のために王としようとした人々は、「何をすべきでしょうか」と言って、方法論を聞いています。それに対して、イエス様は、「信じること」こそが大事であると語られています。これは非常に大事なことです。多くの人々が、信仰を持てずに躓きます。または信仰を持っているようにして、実は離れて行ってしまう、信仰を捨てるか、後ずさりする人たちが多いです。それは繰り返しますが、「自分の益のために、自分の素養のためにイエスに従おう」としていることがあるからであり、そして、ここにあるように、自分が何かをすれば神のわざを行うことができると思っていることです。イエス様のところに行くのではなく、自分で何かをして、自分探しをすれば何かが見

つかると思っています。絶えず、「何かをすることによって、救われよう」としていることです。

あの、金持ちの青年がそうでしたね。永遠の命のために、何をすればよいのでしょうか？ということでした。しかし、問題は、何かをすれば救われると思っている裏で、心の中で、「これだけは絶対に捨てられない」という欲があるのです。そういった真面目さ、人間的なやる気の裏には、自分だけが持っていたい宝物のようにして大事にしている、欲や罪が隠れているのです。イエスを信じるということは、単純なことですが、難しいことです。なぜなら、その自分の中心部分にある、自己中心性をイエス様にすべて明け渡すことに他ならないからです。

2A 天からのマナ 30-40

1B 神からのマナ 30-33

30 それで、彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じられるように、どんなしるしを行われるのですか。何をしてくださいますか。31 私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からのパンを与えられた』と書いてあるとおりです。」

イエス様が突っ込まれたら、早速、群衆のおっかけをやっている人たちの化けの皮が剥がれました。イエス様を信じていなかったのです。自分はイエス様に自分を明け渡すってことはしないからね、と言っているようなものです。そして、あなたはモーセより偉大ではない、と言っているのです。モーセは、我々に荒野でマナを食べさせてくれた、ということです。引用しているのは、詩篇78篇からです。

32 それで、イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。モーセがあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。33 神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。」

そうです、イエス様が言われたように、モーセが天からのパンを与えたのではありません。あくまでも、天におられる神が、父なる神が彼らにマナを与えられたのです。モーセは、そのことを告げた預言者にしかすぎません。ここから分かるのは、彼らが人に依存しているということです。モーセに頼っていれば、マナが与えられた。同じように、イエスに頼っていればパンにありつける、ということです。神を信頼するのではなく、人に依存しているのです。依存は、依存している相手を支配します。自分の思い通りにしたいと願っているから、依存します。

そうです、すべてのものは神から来るのであり、神の憐れみによって与えられるのだという強い信仰が必要なのです。「ヤコ 1:17 すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。」そして、その父なる神が、イエス様を遣わされ、永遠の命、霊の命を与えるようにしてくださいました。

2B 終わりの日の甦り 34-40

34 そこで、彼らはイエスに言った。「主よ、そのパンをいつも私たちにお与えください。」³⁵ イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。

ちょうど、サマリアの女のように、この人たちはイエス様が話されているのを、肉のこと、物質のこととしてとらえています。神のパンを、文字通りのパン、食物に捉えているのです。けれども、イエス様が言われているのは、「わたしのところに来なさい」ということです。主イエスのところに行くのです。そうすれば、霊において飢えることもなく、渴くこともないということです。サマリアの女の話で私たちは学びました、人は誰しも、神にしか埋めることができない空洞があるけれども、それを他のもので埋めようとしている。しかし、埋めようとするほど渴きが激しくなる、ということです。その空洞は、神から遣わされたイエスを信じることによって完全に埋められます。それが、決して渴くことなく、飢えることもないということなのです。

イエス様がここで、「わたしがいのちのパンです」と言われましたね。午前中に、水の上を歩かれるイエス様を見て、怖くなった弟子たちに、「わたしだ。」と呼びかけられましたが、それは、主なる神ご自身を示していることをお話ししました。モーセに主が、「わたしは、わたしはある、というものである。」と明かされて、それ以来、人の必要そのものになってくださる方なのです。だから、何かの必要のための神ではなく、神ご自身、イエスご自身が必要のすべてなのです。

36 しかし、あなたがたに言ったように、あなたがたはわたしを見たのに信じません。37 父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。そして、わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。

ここまで話して、イエス様は彼らが信じようとしなないのを見て取りました。そしてイエス様は、そこには父なる神の意向があることを教えられます。神は、すべての人が滅びることを願っておられません。それはヨハネ 3 章 16 節の言葉を見ればその通りですし、テモテ第一 2 章 4 節、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」とあるとおりです。しかしながら、それでも信じない人がいるのは、そこに私たちの思いをはるかに超えたところで、神の御計らいがあるからだ、ということです。御子であられるキリストご自身が、「父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。」と言われます。主ご自身のところに来るのは、父なる神が与えてくださるからだ、ということです。エペソ書 1 章には、こう書いてあります。「1:4-5 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」

ですから、私たちはキリストに倣う者として、絶えず思い出さないといけないのは、「人が信じて、

救われるのは、もっぱら神のなさることなのだ。」ということです。もちろん、ここでイエス様が、「あなたがたはわたしを見たのに信じません」と言われたように、彼らが信じないという選択をしているのであり、自分の選択について責任を免れません。けれども、私たちが人々にイエス様を伝える時に、その人が信じ、受け入れ、この方のところに来るとするのは、父なる神ご自身の選び以外にはあり得ないということなのです。私たちが説得して、信じさせることはできないのです。イエス様がここで努力しておられるように、何とかして人々にご自身を信じてもらうべく、手を変え品を変えて、言い換えて、ご自身に永遠のいのちがあることを説いておられますが、それでも最終的には父なる神の御手にお任せします。

そして大事なものは、御子なるイエス様は、決して誰をも拒むことはないということです。「わたしのもどに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。」と言われます。パリサイ派の人たちは、イエス様が罪人と食事をしていると言って非難しましたが、悔い改めてご自身のところに来るものは決して拒まず、交わってくださるのです。私たちが、このようなイエス様の寛容を身に着けるべきです。どんな人にも、イエス様のところに来るのは間口が大きく広がっています。ヨハネの黙示録の最後は、こうなっています。「渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。(22:17)」

38 わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです。39 わたしを遣わされた方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることです。40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」

イエス様は、「神のみこころ」を明確にさせています。強調されているのは、「すべての者を、わたしが一人も失うことなく」ということですね。終わりの日まで、イエス様は責任をもって、ご自分のところに来た者たちを守ってください。終わりの日には、よみがえりが起こることを前回学びました。善を行った者も、悪を行った者も、すべてを主はよみがえらせ、そして善を行った者は永遠の命に、悪を行った者は裁きに定められます。その時まで、必ず守ると主は約束しておられるのです。

私は、時々、びくっと来ます。それは、まだ完全にされておらず、自分の罪の責めを受けるからです。これではたして、主にまみえる時にどうなるのだろうか？と心配するからです。確かに、主が望まれているのは、私たちが完全に聖なる者となることです。そうっていないので、びびるのです。けれども、使徒パウロがこのように励ましています。「I テサ 5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれますように。あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてください。」主が真実だから、そのようにしてくださるとのことです。

3A 永遠に生きるマナ 41-51

1B 御父の引き寄せ 41-46

41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンです」と言われたので、イエスについて小声で文句を言い始めた。42 彼らは言った。「あれは、ヨセフの子イエスではないか。私たちは父親と母親を知っている。どうして今、『わたしは天から下って来た』と言ったりするのか。」

初めに追いかけをしていた彼らが、イエス様に突っ込まれて、彼のことは信じていないと言いました。そして、彼らが信じる気がないことを指摘されたら、今度は文句を言い始めました。「まことに、まことに」とイエス様は繰り返して語られますが、神の真理に触れるたびに、心を頑なにしている人々は、その間の部分が明らかにされているようです。

ここでイエス様が教えておられるのは、カペナウムでの会堂です。ナザレ出身ですが、初めの頃は、肉の家族もカペナウムに来たことが 2 章に書かれていました。そしてここに、ナザレから来た人もいたのかもしれませんが、いずれにしても、イエス様を家族ぐるみで知っているのです。それで、「わたしは天から下って来た」ということが、信じ難いこととしています。神から生まれた者もそうですね、「1:13 血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」とありました。御霊によって新生をした人は、肉においては変わることはありませんから、上辺の裁きを受けます。イエス様が受けられたように、受けます。

43 イエスは彼らに答えられた。「自分たちの間で小声で文句を言うのはやめなさい。44 わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。わたしはその人を終わりの日によみがえらせます。45 預言者たちの書に、『彼らはみな、神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます。46 父を見た者はだれもいません。ただ神から出た者だけが、父を見たのです。

イエス様は再び、神の介入なしには、ご自身のところに来ることはできないと繰り返しておられます。そしてイザヤ書にある預言を引用されています、そして、「父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます。」と言われます。そうですね、御霊によって神からの声、教えを受けるからこそ、その人はイエスのところに来ることができます。これはもっぱら、聖霊なる神の働きであり、聖霊が全ての真理に人々を導きます。そして、イエス様は、父なる神については自分だけが見たのだということを証ししておられます。つまり、ご自身が神と同一なのだということです。

2B 天からのパン 47-51

47 まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。48 わたしはいのちのパンです。49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたし

が与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

イエス様は、ここで、肉体の命を超えた霊の命、そして永遠の命について語っておられます。人は、肉体を養うパンを食べても死んでしまう。現にイスラエル人は荒野で死に絶えた。けれども、イエスを信じるということは、死んでも生きるのであり、からだの復活の約束があるということです。

ところで、ここでイエス様は、「食べる」という言葉を繰り返し使われています。信じるということが、あたかも食べることのようなからです。「詩篇 34:8 味わい、見よ。主がいつくしみ深い方であることを。」ある伝道者がこう言いました。「砂糖の味を知るのに、砂糖の説明をしても知ることができない。砂糖をなめないと、知ることができない。」そうです、これが信じるということですね、食べて、味わい知るということであり、信じないと知ることができないということです。

4A イエスの肉と血 52-59

1B 飲み、食べること 52-54

52 それで、ユダヤ人たちは、「この人は、どうやって自分の肉を、私たちに与えて食べさせることができるのか」と互いに激しい議論を始めた。

ついに、激しい議論になってしまいました。彼らはイエス様の人肉を食べることを、イエス様が勧めているように聞いてしまったからです。

53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」

イエス様は、パンを食べるところから、さらに具体的に、ご自分の肉を食べ、ご自分の血を飲むというように言いかえられました。これはどういうことか？ そうです、主はご自身が、罪のための供え物になるのだということを語られているのです。その犠牲を、自分のものとして信じて受け入れなければ、命を持つことができないとされているのです。バプテスマのヨハネが、「見よ、世の罪を取り除く、神の子羊」と宣言したのが、過越の奥義です。イエスご自身が、イスラエルを神の怒りから救い出された、過越の子羊になられたのです。

そして、イエス様が終わりの日に、一人一人をよみがえらせると言われますが、それゆえ、私たちは、主が再び戻られることを思いながら、聖餐にあずかっています。「I コリ 11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。」

2B 留まること 55-59

55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

イエス様は、ご自身の裂かれた肉体、またご自身の流された血潮が自分のものであるとして受け入れる者には、霊においてご自身と交わりができることを説明しておられます。「わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります」と言われていますね、これは物理的に考えたら、訳が分からなくなります。イエス様のうちにいるのに、イエス様がその人のうちにいるのです。ぶり的にはどちらかでなければいけません、霊においてはどちらもそうなっているのです。「I コリ 6:17 主と交わる者は、主と一つ霊になるのです。」

このように、霊における交わりができていますので、それゆえに、父とご自身の持っている命の関係を、イエスを信じる者にも約束されているということです。父と子の関係が、キリストにあって私たちにも与えられているのはそのためです。

58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」59 これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。

以上、イエス様が彼らが「モーセは私たちにマナを与えた」と言ってきたことに対する返答でした。

5A つまづく弟子たち 60-71

1B 霊といのちの言葉 60-65

60 これを聞いて、弟子たちのうちの多くの者が言った。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか。」

彼らはついに、躓いてしまいました。動物の血を食べることさえ、律法では厳しく禁じられているのに、血を飲むこと、しかも人間の血を飲むことを教えていると彼らは受け取ったのです。

61 しかしイエスは、弟子たちがこの話について、小声で文句を言っているのを知って、彼らに言われた。「わたしの話があなたがたをつまづかせるのか。62 それなら、人の子がかつていたところを上るのを見たら、どうなるのか。63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」

イエス様は、自分について来ている者たちが、まるで信じてない者であるかのように、霊の言葉、

命の言葉を理解せず、まるで肉の領域だけで考えていることを叱責しておられます。ニコデモもそうでしたね、「3:12 わたしはあなたがたに地上のことを話しましたが、あなたがたは信じません。それなら、天上のことを話して、どうして信じるのでしょうか。」と言われました。霊に関わることを肉において理解しようとしても、絶対にできません。「I コリ 2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」

そこでイエス様は、「それなら、人の子がかついていたところに上るのを見たら、どうなるのか。」と言われました。かついていたところ、というのは天のことです。主が、オリーブ山のところから天に昇られる時、「わたしが、天から降ってきたパンだ」という言葉を信じなかったのは、どういうことか？ということになります。

64 けれども、あなたがたの中に信じない者たちがいます。」信じない者たちがだれか、ご自分を裏切る者がだれか、イエスは初めから知っておられたのである。65 そしてイエスは言われた。「ですから、わたしはあなたがたに、『父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもつて来ることができない』と言ったのです。」

主は、弟子だと言われた者たちの中に、信じていない者たちがいるという厳しい現実を語られています。これから、弟子たちがつまずいていなくなってしまうのを見ます。使徒たちの手紙の中にも、彼らから離れて行く者たちが、時には名指しで出てくる姿を見ます。「どうして、一緒にいたのに？」と思いますが、イエス様のところにそういう者たちがいるのですから、ましてや・・・であります。そして十二弟子の中からも出てきて、それがイスカリオテのユダです。だから、どんなに弟子として生きているように見えても、父が与えられなければ主のところに行くことはないという厳しさがあるのです。

2B イエスにある永遠のいのちの言葉 66-71

66 こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなりました。

これは、とても辛いことです。五千人への給食という出来事は、主が御国を治めるキリストであることを大きく示すものでした。しかし、それがきっかけになって、このようにして弟子たちが離れて行きます。主が働かれる時に、実はこうやって、元々、仲間ではない者たちが離れるということも経験します。

67 それで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいのですか」と言われた。68 すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。69 私たちは、あなたが神の聖者であると信じ、また知っていま

す。」

ペテロは、あのピリポ・カイサリアで大胆に告白したように、ここでも他の弟子たちを代表して告白していますね。彼の言葉には感動します。「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。」とっています。イエス様から離れたところで、他に行くところがあるのか？ということです。もう、自分が他のものを捜しても何も無いことを知っているのです。躓く人は、しばしば、自分にまだ可能性があると知っているからそうしています。けれども、もう他に行くところはないことを知っているから、このように多くの人が去って行っても、留まります。そして「永遠のいのちのことばを持っておられます」とっています。感動します、イエス様の言葉に、永遠のいのちがあることを知っていました。他の多くの人たちは、しるしや不思議に期待していました。周りの機運に期待していました。流行であればついていきました。しかし、本質的なところ、イエスの言葉に永遠の命があることには無頓着でした。そういう人たちは、去っていきます。さらに、イエス様が神の聖者、つまり、神からの方で、聖なる方ということです。この方が神の御子であることを、言い換えた形で話しています。

70 イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかし、あなたがたのうち一人は悪魔です。」⁷¹ イエスはイスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二人の一人であったが、イエスを裏切ろうとしていた。

そうですね、ペテロがそのようなことが言えたのは、彼や他の弟子たちがそう思ったからではなく、イエスご自身が彼らを選ばれたからです。主に選ばれ、主に召されたからこそ、信仰告白ができ、イエスについていくことができるのです。しかし、ここで衝撃的なことをイエス様が語られました。残された少数の弟子たちの中から、さらに裏切る者が出てくるということです。悪魔と断言されています、それはもちろんユダ自身が悪魔ではなく、悪魔に捕らえられた者ということです。ユダの裏切りはヨハネ 13 章になって出てきます。

6 章は、まことの弟子とそうでない者たちが振り分けられる、分岐点になるような出来事でした。私たちが、何を気を付けなければいけないかお分かりになったと思います。自分が何かの益になるから、イエス様に付いていっていますか？信仰生活、教会生活をしていますか？どこかで躓きます。それとも、呼ばれましたか？選ばれましたか？そして、自分が何かができるということで、イエス様に付いていこうとしていませんか？信じるというのは、すべてを明け渡すことです、この方を主とすることです。